

①「尾瀬の管理のあり方」 2

山川陽一(テーマリーダー)

穂苅康治(信濃支部)、椎名宏子(尾瀬自然保護ネットワーク)、飯田晴康(緑友会)、加納巖(首都圏)、腰塚昭温(つくば市)、斉藤長作(群馬岳連)、鈴木美代(千葉支部)、沼田満喜子(東海支部)、南川睦夫(東海支部)、山田信明(富山支部)、宮本良之(四国支部)、富澤胡桃(尾瀬高校生徒)

管理とは・・・「望ましいと思う形に収めること」

尾瀬の管理とは・・・「尾瀬の自然をこわさないよう維持すること」

尾瀬の自然をこわしている最大要因は何か・・・「人間」

究極の管理は・・・「人が入らないこと」

それができないから、自然とひとが共存する手段として“管理”が必要になる。今まで、東電が一定のお金と人を投入して管理のかんりの部分を担ってきたが、福島第一発電所の事故により、それが難しい状況におちいつている。東電から毎年2億円が尾瀬の管理に投入されてきたが、今年は1億円、来年以降はどうなるかわからないと

いう現実を踏まえ、今後の管理のあり方についてどうあるべきか、メンバー全員が自由に意見を出し合った。(発言順)

- 大山の木道は高架になっているため植生への影響が小さい。尾瀬の木道もすべて高架にしたほうがいいと思う。
- 50数年前尾瀬にはじめて入ったときは、木道などなかった。そのあと登山者が急増して木道が必要になった。東電が維持費用を出せないなら登山者も管理費用を負担すべきだと思う。
- あるべき自然とは何か。人間が入ることによって自然を壊している。入山制限を考えるべきだ。
- 入山料を取るべきである。土地も国が買い上げて管理したほうがいい。
- オーバーユースが最大の問題である。乗鞍の岐阜県側ではマイカー乗り入れ禁止、シャトルバス利用と併せて協力金を徴収しているが、結果として大きな入山者の減少を招いた。上高地でも入山料的な協力金を考えるべきという意見があるが、入山者減に直結することが心配だ。
- 尾瀬は、尾瀬林業(東電)、県、環境省、尾瀬保護財団の4者で管理しているが、この機会に国に一本化したほうがいい。
- 水芭蕉やニッコウキスゲの時期などのハイシーズンや土日休日に入山者が集中する。平準化の方向で入山規制をかけるべきである。
- 木道も過剰設置・過剰整備が目立つ。オーバーユースが最大の問題。人と自然が調和できる接点を探すべきである。
- 一日の入山者の上限を決めるやり方がいい。
- 利用が集中するときは高く、少ないときは安い傾斜料金制で入山料を考えるべき。
- 利用者負担を積極的に考えたほうがいい。
- 東電が負担していた額を全額利用者が負担することを考えると、かなりの額になり、入山者減を招く。
- ひとり当たり1000円負担しても3億円になる。尾瀬のすばらしい自然の代金としてそれほど大きいとは思えない。